犬も食わない

ホチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犬も食わない

【Ｎコード】

Ｎ５５９４Ｉ

【作者名】

ホチ

【あらすじ】

彼女が俺の知らない男と頻繁にメールをしていたことが発覚した

「だから誰だよ！ヒロキって！？」
詰問が何度目になろうとかまうものか、俺は訊く。
「だから！何度も言ってるけど違うんだって！」
先ほどから涼子の答えは変わらない。
「嘘だ！浮気なんだろ？どーせ」
「違うってば！ヒロキっていうのはただの友達だっての！てゆーか、なんで英樹はあたしのケータイ勝手に覗いたわけ！？」
「お前の挙動がおかしかったからだよ！ケータイ取る度きょどっちゃってさ！怪しいに決まってるだろ！だからだよ！」
現在夜の十二時。一人暮らしの涼子の家でケンカは間違いなく近所迷惑だ。大声になった時点で収束する見込みは消えた。頭のどこかで今夜の解決は望めないなと俺は悟った。
「きょどってなんていないよ！英樹にそんなこと言われるなんて心外！もう帰ってよ！」
「言われなくてもそうさせてもらうさ！」
……この季節の夜は気軽に出歩かない方がいい。冷えて仕方がない。駅、ここから距離あるんだよな。
「かといって戻るわけにもいかねーしな……」
嘆息する。ケンカはそれなりに勃発するが、今回のは特別激しかった。――長引きそうだ。
たしかに涼子のケータイを勝手に見たことに問題がないとはいえない。だけどそれだけ心配だったわけで。案の定ヒロキの名前がメールの受信箱にチラホラ見受けられた。怒るなということに無理があるというものだ。
考えるとムカついてきた。涼子が悪いのにどうして俺があれこれ考えないといけないのだ。とにもかくにも今日の解決は不可能だ、全部明日になってから考えよ。涼子も一晩あれば頭も冷えて反省す

ることだろうし。
それにしても……あ〜あ。

あーあ……どうしてこうなっちゃったんだろ。
せっかく英樹と久しぶりにゆっくり出来ると思ったのに。
ヒロキとは全然そんなんじゃない。たしかに英樹の怒りは理解できなくもない。だけどしっかりとあたしの話を聞いて欲しかった。ヒロキは本当にただの友達なんだよ。男女の友情は、あたしはあると思う。思いたい。ただ、英樹が「男女の友情なんて」と思うと言いづらかった。だからメールが来たときは確かに警戒もした。それはあたしも悪かったと思う。だけど英樹はすぐに怒るところがあるから、知ったら怒ることは目に見えていた。怖い？面倒？とにかくそういうわけで秘密にしてた。
知られた結果やっぱり怒った。予想通りすぎてそれも嫌だった。もっと男として度量が欲しい。
仲直りはしたいけどこっちからは折れたくない。向こうも反省するべきだし。どんな理由があれど携帯を勝手に覗いたのは許せない。頼んできたのなら見せてあげなくもないのに……。
しばらくは口利いてやらないでおこう。
しばらく反省してろ。バカ英樹。
なんかムカついてきた。この怒りをどこかにぶつけないと眠れない。
あたしは宏美に電話をかけることにした。この時間ならセーフだよね。呼び出し音を十回聞くまで粘り、ようやく宏美は電話に出た。
「涼子？どうしたの？」
「宏美？ちょっと訊いてよ！英樹がさ……」
「ちょっと待った。もしかして私、あんたの愚痴の聞き手に選ばれちゃたわけ？」

「わけ」
「あー……それ、何時間コース？」
「二時間はかかるかも」
「一時間。一時間だけなら付き合ってあげる。それ以上は悪いけど無理。明日早いから」
「オッケ、それでいいよ。悪いね、ありがとう。それじゃあいくよ？」
あたしが訊くと、宏美の深呼吸の声が聞こえてきた。
「――よし、どんと来な。宏美ちゃんがあんたの不満を聴いてあげるよ」
あたしはいい友達を持った。心の中で宏美に礼を述べ、冷蔵庫からお茶を出しおやつを手元に置き、準備万端になったところであたしは事の次第を話し始めた。

次の日、俺は涼子のケータイにメールを送った。
俺から折れてやるんだから感謝しろよ。そう思いながらのメールに、あろうことか涼子はシカトをきめこんできた。電話にも当然出てこない。
なるほど、そういう態度ですか。――もうこっちからは妥協してやんねーから。

「あちゃー」
やっ、ちゃ、た。英樹からの連絡にまったく気づかなかった。いや、気づけなかったというほうが正しいか。今日は家にケータイを忘れてしまった。よりによって今日という日に。偏に寝坊のせいだ。昨日の長電話を今になって後悔した。

英樹のメールは朝、電話は午後。そして今は、夜。
「こりゃ間違いなく怒ってるよね……」
ま、いっか。いい機会だ、この際英樹にはとことん反省してもらおう。うん、そうしよう。英樹は冷静という言葉を知らなすぎる。すぐに怒るのは悪い癖だ。時間が経てば少しは冷静に話しも出来るというものでしょ。

あの日のケンカから一週間が経過した。依然涼子からの返事は無い。俺からアクションを起こしいるわけではないから返事というのも変か。
う～ん……だけどそろそろ何か行動を起こさなくてはならない気がしてきた。まさか、自然消滅なんてことは――あるの？

やばい。連絡が無いまま一週間過ぎちゃった。もしかして英樹、あたしと別れるつもりなの？あたしに相当惚れてる節があったからそれはないと踏んでたけど……見積もり誤った？

一週間と一日。結局俺から電話を掛けることになった。恋愛は、お互い好きでもどうしても追う者と追われる者に分かれると誰かが言っていた。どうやら俺たち二人の間では俺が前者らしい。……なんとなく悔しい。
涼子からの提案で話しは直接会ってすることになった。
俺も同意した。電話ではなんとも締まりが悪い。

あたしが待ち合わせに指定した喫茶店に英樹はすでに座って待っていた。
「待った？」
「いや」
「そう」
沈黙。
――三十秒。
「ごめん。先に謝っとく」と英樹。「あのときは俺の悪い癖で、涼子もわかってると思うけどカッとなってた。もう少し冷静であるべきだった。すまん」頭を下げる。
あたしが先に謝るつもりだったのに、英樹に先手を取られてしまった。
「あたしこそごめんなさい。もっと早くにしっかりと説明しておくべきでした。友達にも怒られた。英樹が怒るのも当然だって」
「本当に浮気とかそういうのとは違うんだろ？それならもう説明とかしなくてもいいよ。――信用する」
「ダメ、ちゃんと説明させて。このままじゃしこりが残る気がして嫌だから」
「……それなら頼もうかな。俺が納得いくようにきちんと説明してな」
あ、戻った。これならもう大丈夫そう。
あたしは運ばれてきたコーヒーで喉を湿らせた。

涼子の説明は明快で、俺が心配していたことは何一つなかった。杞憂でしかなかった。なぜ俺はあのとき涼子の話に耳を傾けてやれなかったのだろう。すぐ熱くなるのは本当に悪い癖だ。なんとして

もやめよう。
「――わかった。納得したよ。本当にごめんな。これからはすぐに怒らないようにしてみせるから」
「だめ、まだ納得しないで。これも見て」涼子は自分のケータイを俺に渡した。「ヒロキとのメールの中身読んで。そしたら完璧でしょ？」
「え！嫌だよ。そこまでしなくてもいいって、本当にもう大丈夫だから」
「え～、だけど……ねぇ、あたしヒロキとメールするのやめよっか？」
「！？いいって。友達は大切にしないと駄目だって。そんなことしないでくれよ。俺のせいで涼子の友達が減るのは嫌だよ」
「だけど、あたしこういうことでもう英樹とケンカしたくないよ」
嬉しいこと言ってくれる。顔がにやけそうだ。俺のことを好きと受け取って間違えていないよな？
「……わかった。そこまで言うのなら涼子の男友達全員に自分には彼氏がいうということを知らせてよ。俺はそれだけで嬉しいし、安心できる。それで手を打とう」
それはそれでいやらしい提案だと思う。だけど、涼子がフリーだと思われるのはもっと嫌だ。

「わかった。そうするね」
英樹もかわいいとこあるな～。要するにそれってあたしは俺のものだってみんなに宣言したいわけでしょ？別れるつもりも現時点であるわけじゃないし、それもいいかな。
「何にやついてんだよ」
英樹が訝しげに訊いてくる。
「何でもないよ、あたしは英樹のものだからね」英樹の顔が赤く

なった。まったく自分をコントロールするのが下手な人だ。クールな男になるなんて、一体いつの日になることやら。「さてと、仲直りもできたことだし、そろそろ出よっか」

コーヒー二杯分の支払いは俺が持った。非はやはり俺の方が大きかったと反省の意味を込めて。もちろんこれでチャラになるとは思っていないが。

「なぁ涼子、今日はこのままお前の家に行ってもいいかな」

「いいよ。あたしもまだ全然話し足りない」

「まともに話しするのは一週間振りだもんな」

「違うよ、八日」

「そっか、それじゃあ山ほど話さないとな」といって俺は基本聞き役に回るだろう。普段は違うのだが溜まっているときの涼子はすごい。呼吸を忘れているのではないと時々心配になるくらいよく喋る。「よっしゃ、それじゃあ前回の続きからだな。途中で邪魔入らないようにケータイの電源は切っておいてさ」

隣に涼子に俺は思い切りの笑顔を向けた。

ぎょっとした。前回の続きって……さてはケンカのことしか覚えてないな？

ケンカの直前はお互いお風呂上がりの下着姿だったじゃない。あたしがシャワー浴びてる隙にケータイ盗み見てケンカになったのに。そこから？下着姿から？って一瞬考えてしまった自分が恥ずかしい。英樹にそのつもりは微塵もその気はなさそうなのに。あーもう！恥ずかしい。やめてよ！そんな笑顔でこっちを見ないで！

「痛！なんでこのタイミングで殴るんだよ！？」

当然、英樹は突っ込んでくる。
「うるさいな。なんでもないわよ」
あたしが思ったことを言ってら、引くかもしくはその気になるだけでしょ。
「なんだよ、なんでもないなら殴るなよ」
「ごめん」
「あれ、やけに素直だな」
「だって今日仲直りしたばっかりなのにすぐケンカは嫌だから……」
「そっか、そうだよな」
「うん」
「それなら殴った理由教えてくれよ」
「もう！」
ケンカの回数は平均以上だと思う。だけど――それでさらに仲良くなれるなら、それもアリかもしれない。……あ～、これは酷いのろけだ。宏美の奴が聞いたらどんな反応するだろう。
想像すると笑えてきた。
「なんだよ？殴りかかってきたかと思えば今度は思いだし笑いか？」
「ちょっとね」
英樹に言うのは何だかこそばゆい。だけど、まぁ、この後の流れ次第かな。

（後書き）

読んでもらえて嬉しいです。ありがとうございました

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5594i/

犬も食わない

2011年1月20日02時39分発行